

# 中国の転換と八〇年代アジアの展望

中 嶋 嶺 雄

(東京外国語大学教授Ⅱ国際関係論)

## はじめに

現時点で八〇年代のアジアを展望することは非常にむずかしい課題だと思うのですが、大体十年間ぐらいの時間間隔をとってみますと、奇しくも第二次大戦後、年代末になり大きな国際的な出来事が起こっていて、それらの重要な事件が次の十年間をほぼ規定しているような気がします。そのように考えると、一九七八、九年に起こった問題を突込んで分析する中で、やはり八〇年代を展望し得るのではないか。

それから、私自身、六月に中国、この九月にアメリカに

行って参りまして、中国では北京にある国際問題研究所で約三時間半ぐらい先方と国際問題をかなりフランクにディスカッションしました。アメリカでは、ワシントンのジ・アトランティック・カウンシル(The Atlantic Council)の安全保障に関する会議に出席したりして今日のアメリカがアジアをどう考えているのかをある程度つかめたような気がいたします。そんな体験をふまえてきょうのテーマに迫ってみたいと思います。

## 一、戦後国際関係の航跡と八〇年代

それで、まず、十年ごとの間隔という問題ですが、それ

は単なる偶然とはいえないような気がするので。国際関係においても、十年という時間は、大きな意味をもつように思います。一つの新しい国際関係が形成されて非常にフレッシュな雰囲気だ、二年、三年支配するのですが、次の二、三年にはそこに必ず問題が出てくる。そして、その問題を調整する期間があるわけで、それが二、三年。結局その調整がどうもうまく行かなくなったり、ドラスティックな変化が必要になったりするのが一、二年、ということになると、国際政治における時間の成熟概念からしても、やはり十年ぐらいの単位で変化が起っている事実は単なる偶然とは言えないような気がします。

第二次大戦前のことを考えてみても、一九三九年、一九二九年、一九一九年といずれもすぐわれわれの心に思い浮かぶような大きな出来事が起こっていますけれども、戦前のことはさておいて、第二次大戦後も、一九四八、九年というのは、ヨーロッパにおいて、たとえばNATOの成立に見られるように冷戦体制が形成され、アジアでは中華人民共和国が成立した。つまり、四〇年代末期に起こった大きな事件が、やがて一九五〇年代を東西冷戦の時代として規定して行ったと思います。

次に五〇年代の末期には、そうした状況の中ですでに潜在的に進行していた中ソの対立が、一九五八、九年にはご承知のように内部的に単なるイデオロギー上の対立を越え

て、大きな国際問題となる底流を形作ってきたわけで、これは五八年の台湾海峡の危機、あるいは五九年の中印国境紛争を取り上げてみてもすぐわかることであります。そして、中ソ間には、すでに核をめぐる軍事防衛上の抗争が起こっていたわけで、こうして中国とソ連の亀裂が決定的に深まって行きます。

一方、こうした状況の中で、中ソ対立を尻目に、いわば東西冷戦時代からキャンブデービッド会談に示されるようなバックス・ルツ・アメリカーナという米ソ共存体制への移行の展望が出ていました。そして、こういう状況の中で、一方ヨーロッパでEECが固まりつつあったのはこの時期です。つまり、五〇年代の五八、九年に起こった出来事が六〇年代のいわば国際政治の多極化の方向を主導して行ったのです。

さて、六〇年代の終わりはどうか。六八、九年というのは、皆さんご承知のように、五八年のジョンソン米大統領によるベトナム北爆停止、そして六九年のニクソン・ドクトリン。このことがいわば七〇年代初頭の緊張緩和という方向をもたらすのですが、一方、私は、その点にはかなり留保をつけているわけで、同時に六九年にソ連はアジア集団安保を提唱し始める。そして六九年には中ソの国境衝突も起こり、いわば中ソ冷戦といわれる状況が出てくるわけで、結局七〇年代の米中接近にみられる緊張緩和も、中

ソ冷戦によって、つまり、国際政治のかつての東西のサブシステムであった中国が、アメリカ側に転移したことによつてもたらされた反面、そのことはソ連のアジア戦略なり、対米戦略なり、対中戦略がより行動的・軍事的になることであつて、それがいわば七〇年代の国際政治を主導したわけです。

私は、七〇年代というのは、緊張緩和という側面を仮象として実際には中ソ冷戦によって国際政治がますます熾烈な大国間のパワー・ゲームとなっている点を見ていかなければいけないと思います。いずれにしても、そういう状況の中で、結局わが国は、昨年八月に日中平和友好条約という重大な外交的選択をおこなつた。これは、日中二国間においては、戦後懸案処理外交であつたけれども、いうまでもなく、こうした懸案処理をここまで持ち越したことによつて、すでに世界の経済大国である日本が、アジアの最大の軍事大国である中国と、きわめて戦略的な色彩の強いと見做されざるを得ない条項を入れて条約を締結したことがもたらす意味は、非常に巨大なものであつた。こうして国際環境のなかで中越間が悪化し、そして七九年一月には米中国交樹立が実現したわけです。

そして一方、そういう状況の中で、中ソ関係は、戦後のヤルタ・ポツダム体制とほぼ同じくらしい期間一つのフレームのなかにあり、これはすでに形骸化していたとはい

え、六九年春の中ソ友好同盟条約の廃棄という時点で極限に達する中で、また別の底流が出てくる。つまり、中ソ和解への歩みをかなり現実的に展望せざるを得ないような状況になってきているわけでありませう。いずれにしても、恐らく八〇年代は、一九七八、九年というこの時点で起こつた出来事が、やはり八〇年代を主導して行くのではないかと、私はそういうふうと考えているわけですが、恐らく、私はそう思うよりも、中、ソのパワー・ゲームというものは、かなり熾烈に角逐し、当面、「生ぬるい戦争」がつづくと思われませんが、それがむしろ八〇年代の後半にどういう変化を見せるかというところまでわれわれは考えで行く必要があるような気がします。

## 二、中国の轉換の意味するもの

さて、そういう前提をふまえて、いずれにしても中国がどうなるのか、中国の行方の如何がきわめて重大な問題になるわけで、米中ソ関係にしても、アジアにおける国際政治の変動にしても、やはり中国如何という状況は否定し難いわけです。これは、結局戦後のアメリカのアジア政策も、あるいはソ連のアジア政策も、結局中国をどういうふうに扱うかということに最大の問題があつたわけですし、こういうところから見ても、今日の中国の轉換の意味

をわれわれおさえておく必要があるのではないか。

そこで、次に中国の轉換の問題を考えてみたいと思えます。私は一体いまの轉換が、本格的な、いわば、もう再び逆転し得ないものであるのかどうかという問題をまず考えなければいけないと思います。結論から申し上げると、今日の中国の轉換は、ポイント・オブ・ノーリターンだと思う。もはやあと戻りのできない不可逆的な轉換であるが故に、逆にそこには大きな矛盾があるのだと思うわけです。

しかしながら、われわれは、中国の内政を分析し、そして毛沢東政治なり、文化大革命なりの虚妄を客観的に分析し得るだけに、ほぼ中国の将来についてそういう展望を持ち得るのですが、どうも中国の内部においては、中国の現在の指導者を含めて、この点についてはかなり大きな不安があるのではないか。これは中にいると、事態がわからないということがあると思えますけれども、そうした不安の中で、やはり今日の轉換を主導して行く以外にない。それは政治的には鄧小平ラインだといってもいいんでしょうけれども、私はむしろ中国というのは、民衆レベルといましようか、つまり、初めて中国において民衆というような言葉を使い得るような新しい民衆レベルの政治意識が芽生えつつあると思うのです。

そこで、若干そういう問題を印象づける意味でも、『北京の春』という反体制誌に出た「西曆二〇〇〇年に起こり

得る悲劇」という政治幻想小説をここでちょっとご紹介しながら、最近の中国における一つの新しい知識層、知識青年がどういふふうの問題を考えているかをご披露してみたいと思います。

その『北京の春』は、一部にはすでに抑圧されたという報道もありましたが、私自身「民主の壁」の前へ行って、五号、六号と見て参りました。その第五号に出た作品が蘇明という作家が書いた政治的なSFなんですね。これを読んで、中国にもこういう考え方をする人が出てきたのかということを知って、非常に私は驚いたわけです。それは、これまでのわれわれの中国についてのイメージからは出て来ない新しい感覚であり、ある意味では非常に鋭い政治意識であります。単に文革の権力体制を批判するとか、毛沢東家長体制を批判するということだけではなくて、ある意味ではソ連の反体制派に非常に共通しているような思潮をそこに感ずることができます。しかも、そこに出ている考え方は、作者に言わせると、中国ではみんなが考えていることだというんですね。非常に普遍的な考え方だということですけれども、簡単に概略をご紹介しますと、一九九八年の十二月のある日、すでに十五億になっている中国の民衆が敬愛している一人の人物、偉大な指導者が逝去するわけです。そして、まさに中国の民衆十五億が悲しみにひた

ンス、ドイツなど最大限の弔意を表しまして、アメリカは最大の友好国としてアメリカの五十州の州の花で作った花輪を献ずるわけですね。ところが、この偉大な指導者の死とともに、リーダーたちの不可解な死が相次ぐわけです。

そして、ある者は飛行機事故で、ある者は自動車事故で相次いで死ぬわけです。病死もあるのですが、いずれも詳細な病名も発表されなければ、事故の具体的な経緯も発表されない、というところから始まって、そのうちに中国を分裂させる「反革命陰謀事件」が暴露されるわけです。ところが、だんだん暴露が進んで行くと、この「反革命陰謀事件」は、実はある国の国際的背景を持っていた。

外部世界は、それは明らかにアメリカだというふうに見ている、というようところがあって、そして北京の八宝山の葬儀館では、二十二年前に、失脚して行った人たちが次々に名替回復されて、毎日のように名替回復の儀式と遺骨の安置の儀式が行われる。そして、偉大な指導者の死、そして不可解なリーダーたちの相次ぐ死を契機に、従来の価値観が全く逆転してゆく。つまり二十二年前すなわち現在ですが、党内のブルジョア司令部が党を乗っ取ったんだとされます。そして、西側の腐った資本主義の影響を受けた中国から離脱せよ、と。再び階級意識と革命が強調され、そして、外国資本を一掃せよ、対外関係を厳格に規制し、自力更生の革命的な外交路線を復活させよ、というようなこ

とになるわけです。そして、そのころ、すでに西側の援助によって世界の最新式の武力体系を持っている中国には、「霹靂3型」というサンダーバード型戦略ミサイルが次々に出現して世界が驚く……。これはですから、こういうような人を驚かせるようなことを言っているのですが、そのときに、たまたま二十二年前に北京の「民主の壁」に一人の人物が大字報を張り出すのですね。その大字報は二十二年前にはだれも注目しなかったけれども、その大字報を再び張り出すのですが、それは間もなく剝がれてしまう。そして、その大字報の作者は逮捕されるんです。そこで、それからが作者の法廷陳述になっているわけです。作者は、だれも弁護することのない弁論を述べる。中国には、民主がまったくなかった、たとえば選挙は、だれでも名前を書くことができるのに、これまで選挙が自由に行われたことがなかったとか、集會、結社の自由、表現の自由、そういうものが全くない中国の実状を縷々述べて、法廷でいろいろ最後まで主張を遂げるのですが、結局、この作者は、陰謀集団の一員だということで終身禁固に処せられるわけです。もしも彼がある政治集団に属していたならば、あるいはまた事態の逆転によって彼は名替回復することがあったかもしれないが、この作者は、全く個人の意思でそういう立場を表明したわけで、つまり、政治的妥協によって彼が救われることのない運命にあるわけですね。そして、西曆

二〇〇〇年のある日、一人の囚人が石家荘の労働者収容所の採石所の断崖から落ちる。そして、この人物は、すでに捕われの身になって居るわけで、悶々とした気持ちで、獄中で一日五つずつ英単語を覚えようとしている。そして、翌朝また英単語を暗記しようと思つて床に就くわけです。ちょうどその同じ時間に、ある国家工作員が彼の檔案袋

——中国では、だれにでもついている来歴、経歴書の袋です。——中国では、だれにでもついている来歴、経歴書の袋です。——それを開いて、そしてその人物に「事故、転落死」というふうな公安要員が記入するわけです。結局彼は殺されるということを暗示するのですが。そして、国慶節の日に、たまたま一人の女性つまり主人公の妻が「民主の壁」で焼身自殺するのです。そこに男の子と、女の子がやがて現れて、紙を配っているわけです。そこには「お父さんもお母さんも民主のために死にました。お父さんやお母さんは、民主のために自分たちを生きているように残してくれました」というふうな書かれています、やがて例のペトフィの詩を引用するのです。ペトフィというのは、ご承知のように、ハンガリーの一八四八年革命の国民英雄でもある詩人で、一九五六年のハンガリー事件のときに例のペトフィ・クラブがつくられたそのペトフィですね。この辺が非常に面白いと思うのですが「命は貴いし愛情は非常に高価なものだけれども、自由のためなら棄ててもいい」という歌をもじったただどしい字で子供が書いた詩を「民主の

壁」の前で配っている。警察がその場面に気付いたところ、子供たちはたまたまどこかへ行方をくらましてしまうのですが、そこにもう一つ残された詩がありまして、これは唐の例の有名な陳子昂の詩をもじった「先に自由を見ず、後に民主を見ず」というような詩が残されるわけです。そして北京の西単は、もうすでに壁新聞を張る「民主の壁」がないわけですから、それから一年後に、大量の花輪がそこに献ぜられる。そしてその中には「民主の壁を再建するために献金して下さい」とある。そして花輪の籠がお金で一ぱいになるわけです。その中には、紅旗二〇〇〇年型に乗ったある幹部が献金していることもわかるわけで、しかし事態はすでに逆転しているわけですから、二十二年前に建てられた建物をブルドーザーがこわしている場面が出てくる。ところが、その晩、軍隊が人民大会堂を取り囲んであの五〇年代の中国風と洋風の折衷された建物の中では、再び中央の重要な会議が開かれているらしい、つまり再び事態が再逆転することを暗示してこの小説は終わるのです。いま概略ご説明したような、こういう作品が中国に生まれた。これはこのままシナリオにしたら、大島渚さんの「日本の夜と霧」をちょっと彷彿させるような全体のトーンなんですね。こういうものがいま中国に出てきている。いうまでもなく、西暦二〇〇〇年に事態が逆転することを、この作者たちは希望しているわけではないんですね。

現在の中国の転換が、単なる毛沢東体制の批判、あるいは毛沢東体制に対する不満というところに終わってしまつて、そしてそのような毛沢東家長体制が、あたかも中国の政治文化に全くふさわしいものであるかのような時代を形成してきた社会的、組織的な根源がどこにあったかを解明しない限り、いまの転換は再び逆転する可能性があるということを彼らは言いたいわけです。

ところが、この小説が飛ぶように売れて、大変な衝撃をもたらしたというのは、やはり今日の中国の大きな転換が持つ矛盾、それから、華国鋒体制の移行のプロセスが、すべての面で四人組に罪業を着せているようなやり方、これらの問題にかんするいろんな矛盾、そして、にもかかわらず、建前としては毛沢東思想をかかげながら、非毛沢東化をはかりつつある中国の現実に対する民衆なり、幹部なりの不安があるわけですね。そして、ひょっとしたら、幹部たちは、自分のやっていることは天にツバを吐くことではないかという不安もあるでしょうし……。こういう中国社会の中にある非常に不透明な心理、深層心理を衝いていると思うのです。それがこの小説が非常にセンセーションを巻き起こしたゆえんではないか。

これは、最近、中国でとくに中堅幹部層の日和見主義が非常に目立っている。中堅幹部が一つの事を処理するに当たっても積極的に決断をし得ないという問題は、単なる官僚

主義、というよりは、こうした今日の転換に対する不安がもたらす日和見主義ですね、こういうものが非常に強いわけでありますが、しかし、われわれから見れば中国の今日の転換は、中国の指導者が気付いているか、いないかを問わず、むしろ彼らの自覚を越えて、いわば歴史的、客観的な要請ではないかという感じがするわけです。

したがって、一部には、中国には必ずもう一べんゆり戻しが来るんだという見方もあるかと思いますが、私もある点ではそういうことがあり得るだろうことは予測しないわけではない。たとえば、いま鄧小平が急に亡くなったときに、華国鋒や汪東興がどういう立場をとるのかという、そういう問題もあると思います。しかし、大きな潮流としては、やはりポイント・オブ・ノー・リターンではないか。

いうまでもなく、中国の政治は、ほぼ五年間隔のサイクルをもつて、建国後三十年、穏歩と急進のサイクルをくりかえしてきました。建国からはば五五年の前半まで、これはいわば復興と建設の時代であり、そして中国が最も平和指向の外交、穏健な外交をやった時期でした。にもかかわらず、そういう条件の中で毛沢東は、より急進的な社会主義へ中国の路線を走らせて行くわけで、これは五五年後半からの農業集団化であり、やがて五七年から八年にかけての、あの反右派闘争、「大躍進」政策を経て、五〇年代の

終りまで、つまり廬山会議が行われた五九年後半までつづきます。そこでこういう急進的な政策に対するアンチテーゼとして出されたのが、彭徳懐らの立場ですけれども、そのことは彭徳懐の失脚をもたらしながら、毛沢東自身も責任をとらされて、政治の第一線から引き下がり六〇年代前半の穩健な方へ再び轉換した。六〇年代前半の經濟調整期であります。それから文革の急進期。大体六〇年代の後半から七一年の林彪事件までをその期間と見た方がいいのではないかと思うのです。つまり、当時の毛林体制は、文革の必然的な帰結であって、ある種の兵營体制化を全中国的な規模で実現してしまつた。そのことに対する党官僚、行政官僚の不安、危機意識が、林彪事件を生んだとするならば、

そこまでをいわば急進期と考えていいと思うのですが、しかしながら、それから七五、六年の大きな轉換までは、たとえ七三年の十全大会にしても、片や周恩来が出、片や汪洪文が出るといふように、穩歩と急進がほぼ拮抗するわけですね。つまり、「潮流」と「反潮流」が拮抗しながら、やはりベースは「潮流」といわれる穩健路線であつて、むしろ「反潮流」はその拮抗状況の中でも苦しい立場に陥つて行く。そして、そのバランスが崩れたところに七五、六年の轉換があつたわけで、ちょうどこれは、たとえば天安門事件もそうなんです、杭州事件などに象徴されるように、中国社会のいわば内在的な要請に基づいた轉換

だと考えるならば、今日の中国は、大きな方向としては、もはやポイント・オブ・ノー・リターンである。しかしながら、そうであるだけに、つまり、政治路線を逆転することによつてはもはや問題が解決し得ないところに今日の中国の非常に大きな困難がある。「四つの現代化」をとつてもそうだろうと思う。

### 三、中国の行方

さて、この「四つの現代化」という問題については、私もいろいろの場所で申し上げて来ておりますので、ここであえてくりかえしませんが、私は、それでは一体今後の中国がどういう方向に行くのかということを少し試論的に展望してみたいと思います。

今日の中国はいわば「ソ連モデル」を離脱し、中ソ対立を経過している中国なんです、どうも中国にとって選択肢は多様ではない。それは、まさに中国社会が三千有余年の歴史を背負っていること、そしてまたたとえば中国社会がとつてもない農業国家として現存している事実。こうした現実はやはり重いと思います。これは、たとえば、アメリカの場合には、五百万の農民が二億の民を養つてなお食糧が余る。中国の場合には、いま十億の人口とほぼみられるわけで、その八〇％が農民だとすると、八億の民が十億の民を養っているというものすごく効率の悪い、とつてもな

い農業国家なんですね。そういう現実を考えただけでも、中国はそんなにドラスティックな社会的な転換はそもそもできないわけです。そういう拘束を持つ中国の一つの選択としては、私はどうも当面の厳しい中ソ対立と、中国指導者の対ソ敵意にも拘らず広い意味でのソ連型社会主義への収斂、ないしは回帰ということではないかと思うのです。

こういう状況を考えますと、今日の中国は、現象面ではソ連のかつての道に非常に似てきている。私は、中ソ間の、たとえばロシア民族と中国民族の異質性とか、ナショナリズムの違いとか、民族的な個性の違いを強調することにおいては人後に落ちないつもりですが、にもかかわらず少なくとも社会主義という座標軸で中国を見る限り、そこにはたとえばイデオロギー的な上部構造の最近の変化、党のリーダーシップの体質、あるいはサービス部門の官僚化、あるいは中間的意思決定層の官僚主義的な硬直性というようなこと、すべての面で徐々にソ連社会と共通の現象を共有してきております。私もこの六月、西安に五日間いました。ホテルなんかの待遇は、これはまさにソ連のインテリリストが世話をしてくれる中央アジアのタシケントあたりのホテルと全く同じではないか、と感じました。雰囲気もあの辺は似ているのでそんな感じさえたのです。ところが、中国はますますそうになっていくのではないか。しかも、今日の中国の転換が、文革時代のまさに内戦に等しい

ような破壊状況とそれに伴う経済的困難からの余儀なくされた退却である、あるいは革命的な中国からの転換であるということからすると、ちょうどそれはソ連のネップ、二一年から二八年までのネップの時代を思い起こさせます。レーニンが戦争と内乱によって疲弊した経済を回復するために一種の混合経済体制をとるわけで、ちょうど当時ソ連は人口の八〇％が農民でした。そして、今日の中国が「三自一包」をむしろ農業において基本的な政策にしているように、ちょうど同じ様なことをソ連もやったわけですね。それから、農作物の買い付け価格を最近では二〇％引き上げております。また、労働者の賃金を引き上げる。労働者に物質的刺激を加味した労働報償制を施行する。さらに進んで、最近では靴磨きなどといった私的商業部門を認める、家庭副業を認める、それから、外国資本を導入する。これらのことはみんなネップの時代にレーニンがやろうとしたことでもあります。

もちろん今日の状況は、当時の一国社会主義の二〇年代の国際環境とも全く違うわけですし、ソ連は、それからやがて農業の集団化をやりました。そのことによって、いわば社会主義的な本源的蓄積を強行に達成し、やがて工業化に進んでいったのですが、いまの中国は農業の集団化はもうすでに実現しているにもかかわらず、いわば根強い村落共同体的な性向を脱していない中国なのです。そして、こ

れまでの三十年間は、社会主義的な本源的蓄積をほとんどしていない、つまり工業化の基礎ができていない、インフラストラクチャーが全く欠如しているそういう中国だということになると、ある意味でのネップ時代のソ連との類推は可能ではないかと思えます。

しかしながら、また同時に、非毛沢東化という点からすれば、私共はスターリン批判以降のソ連とも比較してみなければならぬと思う。当時、ソ連は、すでに高度工業社会への移行期にあつて、成熟したインテリ、テクノクラート、ビュロクラートなどの新しい社会的階層および彼らの意識性がスターリン時代を極端化させて行った。つまり、もはやスターリン神話の時代ではないというように。こうして非スターリン化を内在的にすすめて行ったわけですが、中国の場合には、そうしたプロセスがまだたしかに欠如しています。ついこの間までは文革、そしてついこの間までは北京政変があつた中国です。ただ、中国の場合、ある意味で今日の西側諸国との交流、ないしは開かれた国際環境というものがそういう欠如をおぎなうことができるのかもしれない。

こういうふうに考えると、今日の中国がいかにソ連が嫌いでも、どこことなく「ソ連モデル」というようなものがひっかかってくる。結局中国も何年かの時間差、タイムラグを持ってソ連の道を歩むのではないかという展望を否定す

ることはできないわけで、この点はやがて中ソ関係が単に外交上の関係のみならず、もっと別の次元で本質的に改善され得るかもしれないという展望、一つの蓋然性を否定できないことと表裏するように思える。もちろん、こういう道が今日の中国をより豊かな社会にするとは考えられないわけだが、これはしかし一つの蓋然性でありましょう。

私は、そこでもう一つの中国の行方として考えられる選択肢としての「ユーゴ・モデル」を見てみたい。

ご承知のように、ユーゴと中国は、国際関係のうえでも、国際共産主義運動のうえでも、東西の非常に対象的な両極でした。その両者が接近し始めていることもすでにご承知の通りです。これはある意味では歴史の逆説でしょうけれども、最近の中国はユーゴに非常に関心を示しており、私共が訪問した工場の管理者あたりも、ユーゴ型の企業管理、あるいはユーゴ型のいわゆる自主管理システムを勉強したいということを言っていた。ご承知のように、ユーゴは、企業の国家的所有としてではない生産の社会化を達成するために、いわゆる労働者——そして農民もそうです——が——自主管理を実現しています。そして、資本主義的な市場経済のメカニズムを導入して、混合経済体制をとっています。有名な労働者評議会とか、代表委員制度（デレゲーション・システム）というような意味での最近のユーロ・コミニストたちが注目しているような新しい実

験をすでに制度化しているわけで、ユーゴの場合には、市場での自由な競争原理による価格決定のメカニズムも導入しています。ところが、中国でも、最近たとえば余秋里副総理の発言などは、市場での需給関係に従って生産を調整するとか、計画経済と市場経済をうまく結びつけようというようなことを言うわけですから、この点でもかなりの共通性があるといってもいいかもしれません。しかしながら、ユーゴが、つまり工業部門の生産と管理のシステムに關する限り、かなりいまの中国とユーゴを比較し得るのですけれども、決定的な違いは、ユーゴでは農業部門がいわば一種の集約的な小農経済だということですね。これは中国と根本的に違うわけです。それから、もう一つは、中国の場合は「二〇〇〇年に起こり得る悲劇」が示すように、民主主義に対する非常に新しい目覚めがありながら、しかし民主主義、つまり多数決の原理といたしましうか、西欧的な民主主義の概念が最も機能しにくいある種のポリティカル・カルチャーを持っているわけでした、そういう中国が西欧型の社会主義を体質として受け入れることができるかどうか、そこに非常に大きな問題があるような気がします。

こうなってくると、やはり第二のユーゴ的な選択も、一つの蓋然性として十分われわれは展望しなければいけないにもかかわらず、かなりそこにも中国的体質との異和があ

るような気がします。

そうすると、結局中国はどこへ行くのか。現在現われているような下放知識青年の問題や上訪大衆の存在などに悩んでいる中国、そして現象面における西欧化が進み、外国崇拜の風潮が増大する中で膨大な人口圧力に悩む中国、工業化のための資本が決定的に不足してインフラストラクチャーや教育、技術の面で非常に立ち遅れている中国、こういう病的な中国を考えると、これは一方、もはや中国は当たり前の途上国ではないかという気もするわけです。そういう展望さえ持てるかもしれない中国でして、中国は単なる当たり前の途上国なんだと言った方があるいは素直だといえるのかもしれない。

私は、今日の中国がかなり長い試行錯誤を経て、一種の「中国モデル」を発見し得るかどうにかかっていると思えますが、ちょうど五〇年代の急激な農業集団化によって、中国に対して最適なモデル、つまりこれは農業国ですから、最も最適な農業形態は何かという、そういう試行錯誤をすることなしに、急激に毛沢東の一種の夢想の中で農業集団化をやったことがいかに中国を大きく誤らせたかを考えますと、これからしばらくの間の中国が、こうした試行錯誤をなし得るかどうかというところにかかっているような気がします。

その点で一つの希望は、最近中国が各省の分権的な自治

とか、省ごとのいわば競争みたいなことに少し賭けようというのをいい始めたことです。私は、むしろ、これまで

のような試行錯誤を繰り返すよりは、広東省なら広東省で思い切って全面的な外資導入をしてみたらどうか。そして、台湾はなりふりかまわぬ外資導入によって資本の不足を調達し、そして農業部門の労働人口を強行に都市に移動することによって今日の台湾経済を作ったわけですから、中国の一つの省も、一つの台湾省と考えれば、そうした実験は可能であって、そういうようなことをいろいろやってみる。それから、たとえば浙江省や広東省みたいなところは合弁企業をいろいろ作ってみるとか、そんなようなことをより本質的なところで中国自身が考えて行くことができるか今後の中国の別れ道があるのではないかと思う。一つは、最近、陳雲が昨年十二月の三中全会で復活し同時に薛暮橋や薄一波も名替回復をした。こういう五〇年代初頭に、五〇年代中ごろといってもいいでしょう、毛沢東型の農業集団化にかなり抵抗した人たちがこのごろさかんに活躍しています。このことは、ひょっとすると、中国の底流として、五〇年代後半、つまり、土地改革まではよかったけれども、それ以後は急ぎ過ぎたんだ——平たくいえば、ですな——というか、いわば農業集団化そのものを見直すという兆候が見えないでもない。そこまでやっばり中国が行かない限り、農民の生産意欲は根本的に回復しない

と思うんです。つまり、集団化が持っている根本的な問題点がそこにあるような気がします。

そして、私はその点で集約的・多角的な個人農業みたいな形態が中国社会に一番適しているのではないかという気がします。今日の中国は、ある意味ではものすごい零細な歴大な数の小農民の国であって、しかも集団化といわれながら、それはむしろ官僚的なマイナス面だけをもたらしている。一人当たりの土地所有は、日本の農民一人当たりの三分の一しかない。それが八億もいる、そういうものすごい零細な農業国家である。これは、いわば、毛沢東的家父長体制が存立した基盤になっていたわけで、ここに一つの問題があるような気がします。

それからもう一つは、若干大胆な議論かもしれませんけれども、いまの中国の農村へ行って、私も今度いろいろ確認しましたけれども、たとえば農村にはいかなるお祭りもないのです。お墓もない。祖先信仰というものは、すでに地域によっては五〇年代の終り、それから陝西省あたりはだいがあとまで残っていましたが六〇年代前半ぐらいでなくなりました。あの中国にそういうものがなくなっている。つまり、毛沢東型革命にとっての桎梏であった儒教的な論理なり、道徳観なりを、そしてまた儒教そのものを否定するあまり実は農民にとって最も自由な安息の場であった道教的な原理までも一挙に否定してしまったのです。

その結果、土俗的な祝祭というものが農村から消えて行く。そういうところに今日の中国民衆の活力のなさがあるわけで、こんなことまでいわば中国自身が考える余地が出てくるかどうかというところに一つの大きな問題があるような気がします。

そういうふうに考えますと、今日の転換しつつある中国社会は、非常に不透明な、あいまいな過程を当分つつけて行くのではないか。それは日本の一部のビッグビジネスが展望したように中国が急速に高度成長することなどでは決してない。中国の「四つの現代化」という従来は政治スローガンであったものに鼓吹されてイメージ化されたような中国が急速に工業化することではなく、やはり中国は中国のみずからの河の流れをゆったり歩いて行く以外にはないのではないかという気がするわけです。

そこで、そういう中国は、また同時に、たとえば一人当たりのGNPをとれば、いまでも二百五、六十ドルですから、まさに世界の後進国と違っていいわけです。台湾や韓国は五分の一か、六分の一です。にもかかわらず、ご承知のように、中国は国際政治の領域においては、まさにパワールームの一翼を担い、世界の超大国として活躍せんとしているかに見える。つまり、国家というものは、いろいろなフェースがあるわけで、いわば社会的には途上国・後進国であっても、中国のように国際的には超大国であり得

ることもいうまでもございません。そういう中国は、それなりのある種の神話を持っておりまして、最近中国の神話が剥けたとはいえ、しかしながら中国をめぐる大国間のかけひきがあり得るわけで、中国自身がそういう吸引力を依然として失っていない。そういう意味でのマヌーバビリティーが依然として存在していることはいうまでもございせん。

そこで、それらの問題を、次に米中関係、中ソ関係とみて、そして最後に日本の立場を若干考えてみたいと思う。

#### 四、八〇年代アジアの国際関係と中国

まず米中関係についてですが、私自身今回アメリカに行つて痛感したこともあるのですが、今日のアメリカは、何かものすごく、恐らく五〇年代の初頭の雰囲気と似ているかのように、ソ連の脅威におびえています。たまたま私がワシントンにいたところが例のキューバにおけるソ連部隊の問題が議会で問題になっていた時期であったためかとも思いますが、ともかくソ連の脅威を非常にアメリカが強調している。日本でも最近そのことがいわれていますが、一体こういうソ連の脅威の強調は、いうまでもなくアメリカの内外におけるリーダーシップの喪失と結びついており、実際以上にソ連の脅威を誇大視して、それに脅えているのではないかという感じさえ受けます。私はもちろんソ連の

脅威を否定するつもりはありませんが、何となくそんな感じがするわけです。これは、結局アメリカがベトナム戦争以来の敗北の結果だと思えます。ベトナムの敗北は、単に戦略的、軍事的敗北である以上に、精神的な敗北であつた。そして、その精神的な敗北が今日のベトナムを見るにつけ、難民が増大し、そしてあの混乱が起こっているベトナムを見るにつけ、アメリカの介入と撤退の戦略的な敗北のみならず、中途半端な介入と、タイミンが悪い撤退というものが、今日のベトナムをもたらししてしまった、ある意味では、もっと徹底した戦略的な配置をとれば、ああいうことはなかったかもしれない、果たしてあるいはまたあのとときのあのようなかたちで撤退したことがよかつたかというような、ある種の非常に屈折した精神的な負い目となつて、今日のアメリカの自信を失わせているような気がします。そして、そのことは、アメリカの東部エスタブリッシュメントといわれるリーダーたちが、何か根本的なところで、従来のアメリカを支えてきた、偉大なアメリカの建国の理念とか、アメリカ社会にとつてかけがえのない民主主義の伝統とか、そういうものを胸を張つて強調する気概に欠けてしまつてゐることを意味しているように思ひます。ですから、言つてみれば、アメリカの文化や、生活様式を規定してきたコアバリューとしてのWASP（白人、アングロサクソン系、プロテスタント）の崩壊現象と表裏

すると思つていますが、それは結局カーターのやつてゐることを見、最近のジョージア・マフィアに取り囲まれたカーターの姿を見、ますますそういう自信喪失にアメリカの東部の人たちは陥つていつてゐるのではないか。しかもカーターに代わるものとしては、スネに傷を持つエドワード・ケネディしかないだけにますます彼らはジレンマを深めてゆく。彼らはイライラしてゐるのです。そして、彼らのイライラ、つまりアメリカ社会の危機が深まれば深まるほど、ソ連の脅威を強調する。そしてソ連脅威論の抬頭のなかで中国をアメリカにとつてのカウンター・ウエイトにしようという見方が非常に強くなつてきてゐる。そういう状況を考えますと、日中条約の選択によつて、米・日・中の一種のコアリッションが恐らく八〇年代は好むと好まざるとにかかわらず軍事的な方向としてかなり強化されるのではないか。もちろん、アメリカ国内にも、中国が果たしてカウンター・ウエイトになり得るかどうかという議論もありますし、パンス國務長官とブレジンスキー補佐官との間にもいろいろ意見の違いがあると思ひますけれども、しかしながら、どうもそういう潮流が非常に強くなつてゐる。それはアメリカ自身が中国をどこまで認識してゐるかということにもなるし、中国に対して持つてゐるある種の幻想がそうさせてゐるともいえるのですが、私はどうもそれだけではないような気がします。それは、私がアメリカ

から帰ってきた直後に、十月三日の『ニューヨーク・タイムズ』が、ペンタゴンの中国に対する軍事的な援助計画、秘密計画を大きく暴露したことからもいえますが、どうもこれにはもっと深い背景があるような気がするのです。ひと口にいうと、それを受け入れる中国の側が今日、そういうアメリカの軍事、技術援助を非常に望んでいることはいうまでもないのですが、これはやはり中国が今回の中越戦争によって、いわばみずからの兵器体系がいかに劣っていたかという重要なレッスンを学んだことにかかわってきます。中越戦争で中国がジレンマに陥り、バランスシートを軍事的に見てみると、単に二十億ドル以上にのぼると推定される戦費を費やした、つまり、現在の中国の外貨保有高に相当する戦費を費やしたことのみならず、ベトナム戦争の軍事的バランスシートを扱った外国の論調にも出ているように、たとえば中国の戦車は通信施設をほとんど持っているが、たとえば中国の戦車は通信施設をほとんど持っているが、いなかっただけです。これは、いまの近代的な兵器体系では考えられないことです。そのために、ベトナム側の戦車にやられてしまったというようなこと。こういう非常にプアーなコミュニケーション・システムしかない軍備体系の中で、今日中国は武器を更新しなければいけない時期に来ている。依然としてミグ17、19など朝鮮戦争や台湾海峡の危機のときの兵器が使われている状況を、現代化しなければならぬ。そうしますと、アメリカとしては、かつてニ

クソンが訪中して、中国に通信衛星施設をプロゼントし、そのことによって中国の情報空間を、つまり、中国が国際商業衛星通信機構の中に入ることによって、中国の情報空間をコントロールし得るようになったように、アメリカとしては、この中国の武器更新という現在のこの重要な時期に、やはりアメリカが軍事的に中国をサポートすることに、中国の兵器体系を、いわばNATOタイプのもので、つまりアメリカ型のものにしてあげば、アメリカにとっても最大の悪夢である中国の対ソ接近はあり得ないだろうというような読みがどうも国防総省のあの秘密計画あたりから見られるように思えます。そして、一方中国は、その辺をまた計算づくの上で、今回の華国鋒のヨーロッパ訪問なんかがあるわけで、当面中国は、たとえばイギリスから垂直離着陸機のハリアーを買いたいとか、すでにいろいろ話が出ております。それからロールス・ロイスのエンジンを中国が入れたとか。つまり、そういうソフトウエアとしてのテクノロジーを入れることを通して中国は当面、国防力の現代化をはかることが中心かもしれませぬ。もちろん、アメリカも、直接中国に武器を売るといふようなことと、あるいは戦闘機を売るといふようなことは、当然ソ連を刺激しますから、まずソフトウエアとしての軍事援助ですね。それから、トランスファーが可能なもの、つまり、ボーイングを輸出することによってナビゲーション・シス

テムを可能にするというような形でのやり方かもしれないけれども、とにかくそういう衝動が強い。そこへ持ってきて最近のコムの例の規制の問題が非常にまたアメリカにとって有利であるような形に処理されつつあるわけです。日米安保体制をわれわれの最も基本的な座標軸にして行かなければいけない日本にとっても、そういう米・日・中の軍事提携の方向が出てきていいのかどうか。私は危険なことだと思いますが、八〇年代には中国をどうするかというのをめぐってのかなり深刻な日米のギャップが出るのではないか。つまり、中国を戦略的、軍事的にどう強化すべきかということにおいても、日米間にはいま新しい矛盾が出てきている。

さて、そこで、その中国はこれまた非常にしたたかです。て、そうしなければならぬといわば「ソ連カード」を意識し、それをもう使い始めているような気がするのです。最近の華国鋒の西欧訪問もそうですが、それと時を同じくしてご承知のようにモスクワでは現在中ソ次官級会談が開かれております。そこに至るプロセスを見ると、この春の中ソ友好同盟条約廃棄、それと前後して中越戦争が起こり、中ソ関係が極限的に悪化したと思われる時期に、今年に国境河川をめぐる交渉が非常にうまく行っているというように、事務レベルでは中ソ双方とも非常に慎重だと思っております。そして、いまのところ、中国はかなり原則論を主張してい

るわけですが、どうも中ソ和解へ向けて中国が潜在的に動きつつある。そのことを示す兆候を一、二お話しみたいと思います。この夏にモンデル米副大統領が北京を訪問した。モンデル訪中は、恐らく台湾法案の可決によって苛立っていた中国に対しアメリカがかなりのおみやげを持って行ったような気がするのです。それは、具体的にはモンデルの訪中声明にも、そういう雰囲気が出ておりました。そして、恐らくアメリカは、台湾法案によって、台湾にも武器を援助する、台湾のいわば軍事的なテコ入れもする、だから、中国本土にも軍事的協力をするのだという、そういう理由づけで今後は動いていくのではないかと思えます。それはある意味で一つの中国論なんであって、私はそういう意味で最近の台湾問題は従来と大きく性格が変わってきていると思います。少なくともアメリカがソ連の脅威をこういふふうによく感じている状況の中では、そういう方向がかなり出てくるのではないか。そうであるだけに、モンデルの訪中は、やがて来るべきブラウン国防長官の中国訪問、そしてやがて次期大統領の訪中というふうにながって行く一つの線がどうも見えるような気がするのです。そのモンデル訪中にあわせて中国は、何と張聞天という古参のボルシェビキを名誉回復させ、そこに華国鋒も鄧小平も列席して盛大な名誉回復と追悼の儀式をやったわけです。張聞天の名誉回復は非常に象徴的で、彼は「二十

八人半のボルシェビキ」といわれる一人で、留ソ派の指導者ですね。王明、博古、張聞天などは、いわばソ連コネク

ションの人物でありまして、そうであるがゆえに毛沢東路線が確立してからは、いわば冷や飯を食わされていたわけですが、解放後の中ソ友好時代に再びソ連大使として起用された。ずっとソ連大使をやっていた人です。ヴィシンスキー、モロトフ、スターリンなどと毛沢東、周恩来が交渉の際にはいつも随行していた人です。彼をいま名譽回復させる理由は何か。彼は四人組の犠牲者でもないし、文革の犠牲者でもないわけです。中国共産党史を書き直そうという意図があることは事実にしても、それをモンデル訪中のタイミングに合わせるところに、いわば中国なりの、ソ連カードの使い方が現れております。張聞天の名譽回復をわれわれは、まさにそういう意味で理解しなければいけないのですが、このことは、やはり一つにはアメリカに對するジエスチュアですね。アメリカからいろいろなものを引き出したい。それから、最近では彭德懷に對する礼賛がものすごい。朝鮮戦争についても、全く評価を逆転させて、彭德懷が英雄であったのだ、という形ですね。これは、やっぱり彭德懷がかつていわば「フルシチョフ主義」者であったことからしても興味深いものがある。恐らく中国は、そのカードをアメリカに見せながら、同時に裏返してソ連にも見せているわけです。つまり、この十月から行わ

れている中ソ会談に備えて明らかにそういうジエスチュアを示しているような気がします。

以上で分析したような状況が八〇年代のわが国に迫りつつあるのではないか。そして、恐らく日本外交は、八〇年代、とくに前半は、国際政治のかなり厳しいパワー・ゲームの中で日中平和友好条約を、単に日中関係だけしか見ずに、その懸案処理を非常に長引かせてしまったらうえに、今日のきわめて刺激的な国際関係の中で、日本としては戦後処理外交としてやったことが持つ意味の重さに對して無自覚であったことに對する代償を当分支払っていかなければならないのではないか。最近のわが国におけるソ連脅威論もありますが、それはむしろ当然のことであって、私は脅威というのは単に軍事力だけではなくて、どういう意図を持っているか、どういう国際環境がその場を支配しているかということをやっぱり総合的に考えなければいけないと思うのですが、どうも日中のときには全く無自覚でワラツとつ走っておきながら、今度は一年後にはソ連脅威、ソ連脅威というのは、非常に奇妙な論理でして、これはある意味で日本にとっても大いに考えなければいけないことではないかという気がしております。

(昭和五十四年十月三十一日の本調査会アジア研究委員会での報告記録、文責＝編集部)